

# アブラム・モイセーヴィチ・デボーリン

—再評価のための伝記的考察—

セルゲイ・コルサコフ ●ロシア科学アカデミー・哲学研究所主任研究員  
市川 浩 ●広島大学大学院総合科学研究科教授 訳・解題



Из титула книги,  
«Абрам Моисеевич Деборин».  
(Москва: Наука, 2013).

アブラム・モイセーヴィチ・デボーリン（本姓、ヨッフエ）は傑出したマルクス主義哲学者で、ソ連邦科学アカデミー・哲学研究所の創設者である。

アブラム・ハイム・モイシエフ・ヨッフエは一八八一年六月七（新暦一九）日、リトアニア・コヴノ【リトアニア語表記で Kaunas（カウ

ナス）：訳者】県のウーピノ【リトアニア語表記で Upiena：訳者】で貧しいユダヤ人家庭に生まれた。父は儀礼屠殺者【ユダヤ教伝統儀式において神に奉げる生贄の家畜を屠殺するもの：訳者】として働いていた。彼は、ユダヤ人啓蒙運動の追随者、いわゆる「マスキール」【ヘブライ語・ヘブライ文化復興運動参加者：訳者】でもあった。

アブラム・ヨッフエは少年時代をコヴノ県のタウロゲン【リトアニア語表記で Tauragė：訳者】で過ごした。一八九四年に教区附属学校を卒業すると、両親とともにコヴノ市に移住し、官立ユダヤ人学校に入り、一八九七年に卒業した。学校教育に並行して、学校の手工業クラスで鍛冶仕事や旋盤作業など手工業を習い、鍛冶仕事の作業場で働いた。この若者が学んだ学校の校長は憲兵隊と結びついていた。デボーリンは友人とともに彼を告発するリーフレットを出した。

独立した生計を立てなければなくなると、デボーリンは授業をし

て稼ぎ、そのささやかな生活を支えた。貧しさとユダヤ人としての出自ゆえに、彼はギムナジウムで学ぶことができなかった。そのため、彼は自分で中等教育終了証書を与えるための試験を受ける準備をはじめた。

一八九八年、デボーリンは革命運動に身を投じた。地下組織に加わり、当時の社会民主主義文献に親しみ、(コヴノに近接する)「スロボダー」【リトアニア語表記で Viljampolė。本来各地の「免税・特惠地」を意味する一般名詞であったが、この場合は、コヴノのユダヤ人居住区を意味する。現地でイディッシュ語に転じている。…訳者】の労働者の間でプロパガンダ活動をおこなった。ロシア社会民主労働党第一回大会代議員であった彼の以前の教師のひとりが大会参加者とともに逮捕された。一八九九年、彼はツィユールツプ兄弟、M・K・ヴラジーミロフ(シエインフィンケル)とともにヘルソン【南ウクライナの県・その県都…訳者】に移り、合法法のマルクス主義学習グループに加わった。彼はヘルソンに派遣された社会民主黨員の連携を支えつつ、半合法法の労働者学校の組織者のひとりとなった。デボーリンの活動は警察の注意を惹き、一九〇二年、ヘルソン警察長官の布告により町を出る必要に迫られた。デボーリンは裕福な地主の家の「家庭教師の口」を見つけて、タヴリダ県【南ウクライナクリミアの一地方。もとはクリミアを意味する古い雅語…訳者】のゴルノスタエフカに移るが、ここからもすぐに退去を余儀なくされる。というのは、当時ユダヤ人がタヴリダ県に定住することは禁じられていたからである。

コヴノにもどると、デボーリンは地域のギムナジウムの中教育修了証書授与試験の受験許可をえる。「政治的な好ましさに関する証明を後日提出する義務を負うことで、ギムナジウムの校長たちに自分が試験を許可されるに足る人物だと確信させることに成功した。試験の一部を済

ませたところで、しかし、わたしの政治的に好ましさからざることが露顯し、すでに許可されていた残りの試験はなくなつた」<sup>[1]</sup>。

一九〇二年、デボーリンはロシア社会民主労働党に入党し、「イスクラ派」社会民主黨員という立場から、スロボダの労働者の間でプロパガンダ活動をリードすることになった。牢獄で亡くなった労働者、III・ログウータの葬儀の日、一九〇二年七月三〇日に組織された政治的なデモンストレーションの後、デボーリンは逮捕され、コヴノの憲兵隊にこの件で尋問を受けるために送られた。釈放されても、警察の特別の監視のもとにおかれた。

同じころ、彼が国外逃亡を手伝うはめになったアナキストのオリガ・タラトウタを自分の家に匿ったとき、家が搜索を受けた。タラトウタを父の姉妹で客として来ているとの偽りが成功し、彼女は逮捕されなかった。しかし、この事件は、一九〇三年末に彼が国外に出る原因のひとつになった。

ロシア社会民主労働党の分裂では、デボーリンはポリシェヴィキに属した。彼は独力で哲学、歴史、政治経済学、そして、ドイツ語、フランス語、英語など外国語(程度の差はあれ、古典語を含む八カ国語を知っていた)を学習した。

一九〇三年から〇四年にかけて、デボーリンはベルリンに住み、当時の偉大な哲学者、経済学者、すなわち、フリードリッヒ・パウルゼン、ゲオルグ・ジンメル、ゲオルグ・ラッソン、グスタフ・フォン・シュモラー、アドルフ・ヴァーグナーらの講義を、聴講生としてベルリン大学で聴講した。いく人かの教授、たとえば、フォン・シュモラーらについては、そのナシヨナリスティックで、君主制的、かつ反マルクス主義的な見解のゆえに拒否反応を催した。社会民主黨員であるロシア

人学生は、彼らの、これ以上ないくらい反マルクス主義的な批判への反感と、自分たちのマルクスやアウグスト・ベーベルにたいする共感を（大学では赦されていたように）足踏みで表すことも稀ではなかった。

デボーリンはマルクス主義文献を学習し、ミーティングや労働者集会を訪れるなどして、ドイツの社会民主主義運動に親しんだ。ベルリンにおけるこうした社会民主党のある党員集会で彼ははじめてベーベルの演説を聞いた。

ベルリンで開かれたロシア社会民主労働党第二回大会の終了後、ロシアにいた党員のために大会の成果をテーマとした報告が編集された。デボーリンが出席した集会は同種の集会に場を提供していた大きなピアホルのひとつで開催された。予期せずして、ある段階でホールは長官みずから率いる警官たちで溢れかえった。被拘留者たちはすぐにカール・リープクネヒトを呼んだ。彼は、弁護士としてのステータスを利用して彼らを釈放させることに成功した。にもかかわらず、数日後には、集会参加者はみな、「好ましからざる外国人」として警察から、プロイセンの領土を離れる公式の勧告書を受け取った。

一九〇四年の秋、デボーリンはスイスに移った。特別の試験（「マトウーラ【大学入学国家資格試験、スイスの制度：訳者】」）に耐えて、彼はベルン大学の哲学部に入学した。彼の教師はルードヴィヒ・シュタインであった。しかし、かなりの程度、この若い哲学者は図書館での彼自身の読書で成長した。

スイスでデボーリンはベルンにおけるロシア社会民主労働党支援者のグループの活動に参加した。ベルンに住んでいたロシアからの移住者でマルクス主義者であったものは、ヴラジーミル・レーニンにロシア社会民主労働党支援者ベルン・グループのために報告をおこなうよう依頼し

た。ナデージダ・クループスカヤ【レーニンの妻：訳者】は手紙でレーニンのベルン到着日を知らせた。このグループのメンバーが車でレーニンを迎えた後、一行はライヒシュトラッセのホテルに向かい、そこでレーニンはロシア社会民主労働党第二回大会の秘密報告を読み上げ、さらに農業問題に関する公開講演をおこなった。

一九〇六年九月、マンハイムで開催されたドイツ社会民主党の定期大会に出席し、そこでベーベル、ローザ・ルクセンブルク、リープクネヒトの演説を聞いた。デボーリンは大会の最中にベーベルと個人的に知り合うことができた。休憩時間、ビールジョッキを手に彼と何度か談笑し、会議と会議の間には彼の家を訪ねた。ロシアに帰国すると、ベーベルとは往復書簡を交わした。

デボーリンにとつてベルンにきた重要な動機は、ゲオルギー・プレハノフと個人的に知り合いになることであった。彼は彼と出会い、そのもつとも忠実な教え子のひとりとなった。後年、デボーリンはこのように回想している。「まだロシアにいたころから、わたしはゲオルギー・ヴァレンチノヴィチ・プレハノフの著作のすべてを知っていたが、これが学問のさらなる前進への良き酵母となった。わたしがプレハノフに会ったのはベルンの駅においてであった。わたしたち、ロシア人学生は、ロシアからの最新のニュースを知ろうと、駅に駆け寄った。しかしながら、駅でわたしが見たのは、わたしが肖像しか知らないプレハノフに似た男性が新聞を読むことに没頭している姿であった。わたしは若くて大胆だった。彼に近づき、こう尋ねた。『教えてください。わたしが眼前に目にしているのは、ゲオルギー・ヴァレンチノヴィチ【プレハノフのこと。ロシアではひとを名と父称「父の名由来のミドル・ネーム。男性は「…ヴィッチ」、女性は「…ヴナ」で呼ぶのが尊敬の表れと

なる：「訳者」ではありませんか。しかし、彼にはこの出会いはそれほど喜ばしいものではなかった。というのは、スパイがプレハーノフのような人物を捜索し、捕らえていたからである。わたしにはそれがわかっていて、わたしは自分がロシアの社会民主党員で、出会えてとても喜んでお話ししましょう。わたしはあなたの著作を全部読んでいますよ。このとき、本当の会話がはじまり、われわれは双方ともそれに満足した。この日からわたしたちの友情が始まった」。

これは彼の人生にとって大きな出会いであった。プレハーノフはデポーリンにとって学者の、そして革命家の理想であったし、その作品は哲学における著作の手本であった。プレハーノフへのある手紙のなかで、彼はこう書いている。「わたしは努力して、お手本であり、理想ともなる教師の信頼に足る教え子になります。誰にでも、理想に向かって努力することは赦されています」。

一九〇八年、デポーリンはベルン大学を卒業した。そのときまでに、彼はロシアとドイツの哲学文献、政治文献について堅固な素養を身につけていた。新時代【ここでは「近代」の意：訳者】の古典哲学、とりわけスピノザ、カント、ヘーゲルの著作に精通し、社会民主主義の諸問題をよく調べ、マルクス、エンゲルス、カール・カウツキーの著作を学んだ。こうしてえた知識はデポーリンに、マルクス主義の文献学者として発言する可能性を与えた。彼は、ありうるすべての批判から弁証法的唯物論を擁護しつつ、哲学論争に活発に参加した。一連の彼の哲学論文はマルクス主義的雑誌や論集、そして、(一九〇五年から)ドイツ社会民主党の理論誌『新時代 (Die Neue Zeit)』誌に発表された。一九〇六年、彼は『新時代』誌にカウツキーの著書『倫理と唯物論的歴史観』について

の書評を掲載し、ある論文でマツハ主義を批判した。デポーリンは、カウツキーの、編集部になんらの断りなしにマツハ主義者にこの雑誌のページを提供した協調的な態度を見て、『新時代』誌上でマツハ主義に反対する論陣を張る必要を感じたのである。さらに、プレハーノフ編集の『現代思想』誌に寄稿したり、『唯物論文庫』刊行に動員されたりした。『未来 (Zukunft)』誌に論文「フェルディナント・ラサール」、哲学者としてのジトロフスキー、「フィヒテの哲学について」を発表した。

一九〇七〇八年、デポーリンは初の大きな哲学的著作、『弁証法的唯物論哲学入門』を執筆した。そのなかで、彼は弁証法的唯物論の形成が「新時代」の哲学が歩んだ道の合法的な帰結であることを示すことを課題とした。このことはこの著作のための資料選択の説明となる。デカルトやライブニッツといった大陸流の合理主義には触れず、彼は、フランシス・ベーコンやトマス・ホブズに始まり、唯物論的な性格をもつイギリス流の経験主義の発展に関心を集中させる。彼はジョン・ロックの感覚論を画期とみなした。ロックの哲学は、それ自身の矛盾によって、哲学的思想の発展の経路における一種の分岐点であることがわかった。ロックは、われわれの理解は物質に照応していることを確信するが、同時に、認識においてわれわれはその感覚の境界を超えることはできないとみなしている。ロック流の哲学のこの側面が、われわれの思考の現実世界との関連を拒み、対象間の相互関係を主観主義的精神に還元する、ジョージ・バークリーの現象論、デーヴィッド・ヒュームの心理主義の源泉となるのである。ヒューム主義の合法的な帰結となるのはカントの先験的観念論であり、それによれば、存在の形態、別の言い方では、カテゴリーが認識の産物、主観の機能なのである。カントの二律背反における実践の矛盾した性格の反映は、まったく合法的に現象論と形而上



学を克服したヘーゲルの、客観性をもつ観念論的弁証法に近づいてゆく。デボーリンによると弁証法的唯物論はヘーゲル哲学の遺産継承者と公正にみなされるのである。

デボーリンの著作は、単なる哲学的研究ではない。それはマツハ主義やボグダーノフやルナチャルスキーの著作に現れたそのロシア的変種に反対することを志向した、先鋭な論争の書であつた。

デボーリンはベルンからジュネーヴのプレハーノフに、ある著作の手稿を送つた。プレハーノフはそれを注意深く読み、編集を加えて、ユーリー・マルトフとヴラジミール・ボンチブルエーヴィチに頼んで、『現代世界』誌上に発表するよう全力を尽くした。しかしながら、『現代世界』誌編集部は、手稿の各章をもとに準備されたデボーリンの諸論文を掲載することを拒否した。

レーニンがデボーリンのこの著作のを知り、そのために、一九〇九年、この著作手稿から抜粋したものを独立した論文のかたちで論集のひとつに掲載した。この論文に関する、広く知られたレーニンの批評的なメモは、最終的にはその『哲学ノート』に収められた。

デボーリンの、マルクス主義的、唯物論的視点から書かれた『弁証法的唯物論哲学入門』は検閲とその他の妨害に遭遇した。デボーリンとプレハーノフとの往復書簡は、一貫して、その出版に関する困難の問題をテーマとしていた。デボーリンのこの主著は、ようやく一九一六年出版にこぎ着けた。それは、ボンチブルエーヴィチによつて、「生活と知識」出版社から出版され、プレハーノフが序文を認めた。この書は一九二二年に再版された。

デボーリンはプレハーノフの忠実で、熱狂的な教え子であつた。この本に関するプレハーノフの所見を耳にすると、デボーリンはみずから

教師にこう返事した。「親愛なる同志にして、深く尊敬するゲオルギー・ヴァレンチノヴィチ！あなたのわたしの作品に関する批評はわたしに勇気を与えました。わたしは努力して、今後は、わたしにとつて模範となり、理想ともなる教師の忠実な教え子になります」<sup>③</sup>。

一九〇八年ジュネーヴで、マツハ主義との「総合的な」討論がおこなわれた。デボーリンが基調報告をおこなつた。明らかに、プレハーノフとの思想的な近しさと著名なボリシェヴィキ、アレクサンドル・ボクダーノフやアナトーリー・ルナチャルスキーらをも含むマツハ主義者との論争はデボーリンがメンシェヴィキ党派にポジションを移したことを物語つていた。この年、彼はボリシェヴィキを攻撃する論文を、メンシェヴィキの非法雑誌『社会民主主義者の声』に発表した<sup>④</sup>。

一九〇八年一〇月、デボーリンはコヴノに帰還したが、一九〇九年にはペテルブルクに出向いた。プレハーノフの推薦状を持つていたにもかかわらず、そこで仕事を見つけることに失敗し、きわめてひどい物質的条件で生活を送つた。彼はロシアから自分の教師に書き送つている。「ゲオルギー・ヴァレンチノヴィチ、手紙をください。わたしにあなたの手紙を長い間待たせないでください。あなたは、わたしがどれほど心配してあなたの手紙を待つているか、おわかりにはならないのです。どれほどあなたにお会いしたいと渴望していることか。もし、このことをご存じなら、ときにどれほどの悲しみをわたしが感じていることか。なにしろ、あなたの姿にそれほど多くのことを結びつけて考えているのです。あなたのお骨折りに、今一度感謝いたします。最良のこと、なによりご健康をお祈りします。あなたのお腕を固く抱きしめます。あなたのご家族に熱烈な挨拶を。完全にあなたの忠実なA・ヨッフエ」<sup>⑤</sup>。

デボーリンは、印刷会社「友 (Der Freund)」社に、最初は会計係と



セルゲイ・ニコラエヴィチ・コルサコフ (Сергей Николаевич Корсаков)  
一九七三年一月一〇日、トヴェリの生まれ。モスクワ国立大学哲学部を一九九四年に卒業し、同大学院を九七年に修了。哲学博士。ボリス・ゲッセン、イヴァン・ルポル、ウラジーミル・アドラツキール、ソ連時代のマルクス主義哲学者の業績の再検討を多く手がけている。

して、それから事務主任として勤務することになった。のち、その新聞印刷の支配人となり、そこで何度か編集もおこなった（一九一〇年に新聞編集部はワルシャワに移転した）。まさにこの頃、彼は、両親の家にいた祖母のひとりりを記念して、デポーリンという筆名を名乗るようになった。このとき存在した、哲学に関する著作を刊行する唯一の可能性は、『現代世界』誌上に、出版された哲学の書物についての批評をときおり掲載することであった。彼は、長年親交を結んでいたプレハーノフとの書簡のやりとりを続けた。そのひとつで、彼はプレハーノフに、「わたしは、あなたの著作で数世代が育つと確信しています。そして、わたしはととても嬉しいのです」<sup>6)</sup>。

一九一五年、デポーリンはペトログラードに帰り、そこで「第一次世界大戦犠牲者支援ユダヤ人委員会」の代表として活動した。一九一七年に「戦争と反革命の犠牲者支援ユダヤ人委員会」と名を替えた同委員会に彼は一九二〇年まで活動を続けた。

デポーリンはハリコフで一九一七年の二月革命に遭遇した。そこから、ただちにポルタヴァにうつり、しばらくそこで県労働者＝農民代表ソヴェエトの副議長、そして、コルニーロフ叛乱（一九一七年七月のラーヴル・コルニーロフ将軍による反ソヴェエト・クーデター騒ぎ、すぐ鎮圧され、かえって一〇月革命の呼び水となった：訳者）ののちソヴェエト執行委員会によって設置された軍事革命委員会の副議長を兼務し

た。プレハーノフがロシアに帰還するとただちに、彼は「自由なロシアにおける革命と社会主義の大切な教師、そして理想的な指導者に挨拶できて幸せです」<sup>7)</sup>との電報を打った。

一九一七年九月、デポーリンはポルタヴァ・ソヴェエトの代表として、「民主会議」に参加した。デポーリンは、国際派メンシエヴィキの立場を採り、その立場から「国防主義者」であったプレハーノフと政治的に袂を分かった。プレハーノフはデポーリンの戦争にたいする態度、プレハーノフが「背信」に分類した態度を赦すことができなかった。この絶縁は一九一七年に起こったが、デポーリンは次のように回想している。「プレハーノフはペトログラードに到着すると、兵士代表ソヴェエトの集会で演説した。そのとき、彼は、兵士が「勝利に終わるまで」戦争に留まろうとする国防主義者が「説得」しても、ドイツ人への攻撃を欲しくなくなったことに触れた。「勝利に終わるまで」戦争を支持するものとして、プレハーノフも演説した。わたしは壇上に彼とならんでいたが、彼が兵士に攻撃を訴え、攻撃を拒否したもののへの処刑を支持したことに衝撃を受けた。彼の演説の後、彼にお別れの挨拶をしたとき、わたしはまったく明瞭に、彼に自分の憤慨を伝えた。彼は、わたしを「裏切り者」と罵った<sup>8)</sup>。十月革命の後、デポーリンはメンシエヴィキから離れた。

一九二〇年、レーニンの個人的な指示で、デポーリンに学術的・教育的活動の幅広い可能性が提示された。彼は、ヤーコヴ・スヴェルドロフ名称共産主義大学、そのマルクス主義学科で教鞭を執りはじめた。一九二一年からはその哲学教室の主任を務め、さらにマルクス＝エンゲルス研究所の副所長となった。一九二二年からは「赤色教授学院」の哲学科を率いるとともに、その理事会のメンバーとなった。一九三〇～三一年には「哲学・自然科学赤色教授学院」の院長となった。党活動家のため

の学術的・啓蒙的図書の編集者となった。

一九二二年、デボーリンは『マルクス主義の旗の下に』誌の編集評議会の一員に引き入れられた。この年、レーニンに会い、同誌の活動の重要な要素と「戦闘的唯物論者協会」の設立の問題を討議した。一九二三年、彼はこの雑誌を主宰することになった。

デボーリンは一九二四年に設立された「戦闘的唯物論者協会」の創立メンバーのひとりであった。一九二八年一月、その設立会議で、彼は「戦闘的唯物論者」弁証法家協会」の理事会議長に選ばれた。

一九二二年、デボーリンは共産主義アカデミーの正会員に選ばれ、その幹部会、および『共産主義アカデミー紀要』編集評議会の一員となった。一九二六年から彼は『ソヴィエト大百科事典』の哲学部門を指導することとなり、学術分野のレーニン賞選考専門委員会のメンバーとなった。ロシア社会主義連邦ソヴィエト共和国教育人民委員部の学術総評議会のメンバーでもあった。

一九二三年一月二日、学術総評議会科学・方法論部会の決定で、デボーリンはモスクワ国立大学、および「ロシア社会科学系学術研究所連合」共同の「科学的哲学研究所」の参事会メンバーとなった。一九二三年三月八日、研究所参事会がグスターヴ・シュペート【哲学者、美学者、マルクス主義者ではなかった。一九三七年、銃殺さる…訳者】指導の「影響」を克服して、「正所員、および第一級の研究員の任命にあたっては厳格な唯物論の路線を保持する」ことを鮮明にしたため、この研究所の正所員となった。一九二四年九月二三日、「ロシア社会科学系学術研究所連合」幹部会布告により、デボーリンは「科学的哲学研究所」の所長、および同「連合」幹部会員に任じられた。

デボーリンは、ソヴィエト哲学の形式上の、そして実質的にもリーダー

となり、これらの役職すべてを「累増させつつ」務めた。

一九二七年、彼は共産主義アカデミーに哲学セクションを、一九二八年には「ロシア社会科学系学術研究所連合」と「科学的哲学研究所」とを統合して哲学研究所を設けた。

この時期のデボーリンのもっとも重要な功績のひとつは、哲学の根拠が存在にあることを確認しつつ、単に理論面で発言するのみならず、実践的・組織的活動においても、機械論者【古典力学的な因果律によってすべての現象が説明できるとする立場で、ソ連では一時、唯物論の体系的な解釈として勢力を張った。アルカジー・チミリヤエフら…訳者】に特徴的な哲学的ニヒリズムに決然と反対したことである。結果として、一九二〇年代の後半には、この科学＝哲学にたいする態度が本質的に変化した。すなわち、哲学は、「縁に放り投げ」なければならぬ搾取者の過去の「遺物」に占領された好ましくないものから、優先度の高い科学へと変容した。デボーリン率いる哲学研究所の組織もまた、こうした変化の頂点にいた。

また、デボーリンがひとりだけで哲学を擁護しようとしたわけではなかったことも重要であった。彼には、この偉大な科学を守り通す一群の若い才能を育成することができた。彼らは、弁証法理論と哲学史に関する、今でも意義をもつ一連の著作を著した。デボーリン派にとって弁証法研究の綱領的な方向性は、マルクス『資本論』の論理学の研究であった。これらの問題の研究のために、哲学研究所にデボーリンによって特別のグループが設けられた。

デボーリンは、自分の教え子たちを、哲学の古典的著作出版という高尚な事業に引き入れた。このおかげで、一九二〇年代、過去の傑出した哲学者の多数の著作が翻訳され、出版された。彼のイニシヤティヴで一



作家マクシム・ゴーリキー（左）をマルクス・レーニン主義研究所に案内するデボーリン、1928年。未亡人提供。

連の『唯物論全書』、『無神論全書』が刊行されたが、それらのなかには、トマス・ホップズ、ジョン・トーランド、ジュリアン・オフレ・ド・ラ・メトリ、ドゥニ・デイドロ、クロード・アドリアン・エルヴェシウス、ポール・アンリ・ドルバック、ルートヴィヒ・フォイエルバッハその他の著作が含まれていた。また、ロシア語による『ヘーゲル著作集』の刊行もはじまった。

デボーリンの著作はいく度かドイツ、オーストリア、ギリシャ、日本、中国、アメリカその他の諸国で出版された。

一九二八年七月四日、全連邦共産党（ボルシェヴィキ）中央委員会の決定により、デボーリンは党員候補期間【正党員になるまでの、一種の見習い期間：訳者】を経ずに党に迎えられた。一九二八年四月二七日、「ロシア社会科学系学術研究所連合」幹部会によりデボーリンはソ連邦科学アカデミーの正会員に推薦され、一九二八年一月二日、科学アカデミー・人文科学部は賛成一六票、反対一票でこれを承認したものの、一九二九年一月二日、科学アカデミー幹部会に提案されたところ、投票に参加した三〇票のうち二〇票の支持票が必要であったにもかかわらず、デボーリンに賛成の票は一八票、反対は一二票であった。この落選

には、デボーリンを候補とすることに反対したヴラジーミル・ヴェルナツキー【鉱物学者、地球化学の創始者のひとり、科学思想家、二月革命後の臨時政府で国民教育次官を務めるなど、科学・教育行政にも関与：訳者】の「覚書」が影響した。ヴェルナツキー「覚書」の文献欄に附せられたコメントにおけるその論述は弁明のようでもあった。それゆえ、この問題はより詳しく検討しなければならない。

ヴェルナツキー「覚書」を注意深く検討すると、彼の哲学的知識の特徴付けに必ずしも適切でない理解が見いだされる。彼はあれこれの哲学の有効性の基準として、それがどのように「*「精確な科学的な研究」*に反映されているかで選り取ることを提案している。科学は「*「哲学の成果ではなく、科学的方法の助けによって正しく発達する」*。ヴェルナツキーは、哲学を単に科学の達成物の一般化、論理的発展の機能に押しとどめ、哲学的方法の科学的認識に果たす役割を否定する。弁証法的唯物論は、彼によれば、「*「ヘーゲル主義の遺物」*と特徴付けられる。彼は、「*「ヘーゲル主義弁証法」*が「*「自然科学や数学に入り込もうとしている」*」として危惧を表明する。認識の方法に転化した、ある種の思考の歴史の「*「総体」*としての弁証法や論理学のヘーゲル以降の理解はこのアカデミー会員によつて無視される。ところが、デボーリンにとつては、科学的方法を哲学のそれにすり替える方向を強化することなどありえないことであった。アカデミーの特別委員会に準備されたが、説得的ではなかったヴェルナツキーの「*「A・M・デボーリンの学術的著作に関する覚書」*」のなかで、「*「哲学はいかなる意味でも万学の女王、学問のなかの学問、などではなく、諸科学のひとつであり、その対象は方法である」*」ことを確認しつつも、デボーリンは、最初から、弁証法的唯物論の研究を科学的認識の方法論とみなしている、と述べられていた。このようにして、ヴェ



ルナツキーの「覚書」のなかでは、デボーリンの科学的な視点を分析することなしに、多くの自然科学者の思考に典型的にみられる、科学研究をスコラ的な図式とすり替えるものとしての哲学の「古いイメージ」が描かれていた。さらに、デボーリンが、一般的に見て、科学アカデミーに選出された最初の哲学者であり、その当時、選抜の基準はまだ定式化されていなかったことを忘れてはならない。

ヴェルナツキーは、科学アカデミーはその会員にこのようなタイプの哲学者ではなく、科学者を、すなわち、哲学系諸科学、哲学史、論理学、心理学の代表的研究者をえらばなければならないと確信していた。海外でのその仕事が有名で、国のなかでも偉大な哲学史家のひとりであったデボーリンには哲学史関連の仕事もあつたことは議論の余地のない真実であつたにもかかわらず、ヴェルナツキーはこれらの仕事の質を審査しアカデミーの基準に照応しているかどうか審議することなく、それらを所与の基準に合致していないものであると申し立てた。

ヴェルナツキーにはこのことについて直接言及したものはないが、アカデミーの哲学関係のポストに空白が生じ、「機械論派」からの候補が出ると、その人物への態度はまったく違ったものになっていただろうと仄めかした。ソヴィエト弁証法的唯物論内部の方向性をめぐる論争に対して、「覚書」の著者が宣言した不偏不党ぶりは、相争う方向性の一方に対する選好へと替わる。彼は、「機械論派」のリーダーたちを家族とまで呼んだ。そのおかげで、彼らはアカデミー会員を考するものたちの「好意」を期待できると考えた。

どうやら、アカデミー会員選出における共産党員デボーリン（および、ニコライ・ルーキン、ヴラジミール・フリツチェ）の落選を党機関は見過ぎなかつたらしい。一九二九年二月一三日、一月一二日に選ばれた

ばかりのアカデミー会員も出席して、新たに選挙がおこなわれた。五四名の選挙参加者のうち、五二名がデボーリンの選出に賛成した。

一九二九年四月、デボーリンは「第二回全連邦学術機関内マルクス・レーニン主義者会議」で基調報告をおこなった。会議の諸決議では、哲学論争におけるデボーリン派の勝利が確固としたものになった。デボーリン・グループの将来の凋落は、この定評あるマルクス主義哲学の理論家でソヴィエト弁証法的唯物論のリーダーが置かれた状況によって予定されていた。ソヴィエト弁証法的唯物論のなかで、デボーリンは「偉大な転形期【一九二〇年代末からの工業化と農業集団化、そしてスターリン権力確立の時代、スターリン自身が命名した：訳者】」にいたのである。ソ連邦科学アカデミーの公式諸文書のなかでデボーリンが「ソ連のみならず、全世界における弁証法的唯物論哲学派の今日的な代表者であり、「厳格な後継者としての、正統派としての精神においてこの哲学の問題群と内容を立案している」と書かれている状況に、スターリンは我慢できたであろうか。広く知られたマルクス主義理論家のなかから、プレハーノフとデボーリンを叩き出し、スターリンはマルクス、エンゲルス、レーニンに直接繋がるものとなった。

一九二九年一二月、デボーリンは『プラウダ』紙に首領の記念日【二月二二日がスターリンの誕生日：訳者】に向けて、スターリンを哲学者として描く文章を書くように提案された。デボーリンは、いかなる政治的な配慮からでもなく、純粹に合理的な動機からこれを断つた。彼は、「このような論文は、哲学的な著作をもつレーニンについては書けるが、スターリンは政治家であつて哲学者ではない」と述べた。この瞬間からデボーリンとデボーリン派、そしてその後の経験が指し示しているように、ソヴィエト・マルクス主義哲学全体の運命は予見されていた。

デポーリンは後日、「中央委員会の当時の煽動宣伝部長はわたしに、今後は、哲学を含むすべての分野でひとりの権威者を確認することが要求されている。この権威者というのは、われらの首領、スターリンだと述べた<sup>14)</sup>」としている。

デポーリンの拒否は哲学者としてのスターリンを弱体化させるもので、デポーリン派、より広く言えば、ソ連におけるマルクス主義哲学の破滅の原因となった。哲学研究所でおこなわれていた、基本的な理論的、哲学史的諸問題の研究に対するデポーリン的な路線は、哲学のスターリン化に関するイデオロギー的キャンペーンの犠牲となるほかはなかった。

一九三〇年、デポーリンの哲学における指導性に対するスターリニストの攻撃が大規模に展開した。そのときはまだ明らかにされていないかった共産党中央委員会の決定により、デポーリンとその支持者は一九三〇年に、全連邦哲学会議を開催する権利、『哲学の諸問題』誌を刊行しはじめの権利、研究所ですでに準備された『哲学事典』を印刷に回す権利、第七回全世界哲学会議に行く代表を組織する権利を剥奪された。哲学研究所の活動は完全に麻痺した。一九三〇年一〇月の共産主義アカデミー幹部会で、「重く受け止められるべき」論題として、デポーリンにそのメンシェヴィキとしての過去を思い起こさせたとき、すべては完全に敗北に終わった。

さらに規模の大きなデポーリン派に関する討議が「全連邦戦闘的唯物論者」弁証法家協会」の会議でおこなわれようと準備されていた。「アパートにミーチン【マルク：訳者】、ユージン【パーヴェル：訳者】、ラリツェヴィチ【ヴァシーリー：訳者】がやってきた」とデポーリンは回想している。「彼らは、わたしに最後通牒を提示した。公開の場でわた

しが自分の教え子を人民の敵であるとして粉砕しなければならない、と言うのである。スターリンその人を偉大な哲学者と宣言しなければならぬ。よくわかつていたが、この指令を拒否することはカテゴリー的にわたしがリスクを冒すことになる。わたしが拒否したあと、わたしと、わたしと考えを同じくするものたちに凶暴な攻撃が続いた。とくに、マルク・ミーチンをもつとも野蛮な誹謗中傷に留まることなく、さらに粗暴にふるまった<sup>15)</sup>。一九五〇年代にデポーリンの広報として働いていたエヴゲニー・プリマークは、かれの回答を詳しく伝えてくれた。「わたしは自分の教え子や友人を渡さない<sup>16)</sup>」。一九三二年に開催された「協会」の会議にデポーリンは出席しなかった。

デポーリン派の理論的見解の問題を、彼らに向けられた糾弾との関連で専門的に研究している論者たちは、これらの糾弾の虚偽性を詳細に明らかにしている。H・B・コルシュエノフが書いているように、「弁証法家」、なかでも目的をはるかに超えるところまでデポーリンは追い込まれたが、そこには見解の目的意識的な捏造があった<sup>17)</sup>。H・H・ヤホットは、ミーチンとその同僚が、「スターリンに対する個人崇拜の助長」という真の目的ゆえに、「説得力ある事実を無視し、糾弾を取り下げなかった<sup>18)</sup>」ことを明らかにした。スターリンの走狗たちは、レーニンの著作の哲学的意義そつちのことで、最初に「哲学者としてのレーニン」というテーマに取り組んだものたち（デポーリン、イヴァン・ルポール、グリゴリー・バムメラ）を弾劾した。彼らは、これが意識的な虚偽であることを知っていた。ここで書いている事件の一年前、ミーチンその人が、「レーニンと哲学」という論文のなかで、デポーリンの『思想家としてのレーニン』という著作について熱狂的にこれを歓迎する批評を書いていたのである。「一般向けで、生き生きした言葉で書かれたこの本

は、レーニンの哲学的見解、さらに言えば、弁証法的唯物論にも関する優れた叙述である。多数にのぼるレーニン主義に関する文献のなかでも、デボーン同志のこの一冊はその質において抜きん出ている<sup>19)</sup>と。デボーン派が「レーニンの段階」を忘却しているとするスターリン主義者の捏造の真の動機は、その当時においてすら、ダヴィド・リャザーノフがその逮捕の直前に共産主義アカデミー幹部会に送った抗議文で明らかにしている。彼は、党派性の原理が「中央委員会のあらゆる布告を、われわれ『赤い』哲学者全般の意見に反して、弁証法的唯物論の見地から守り通す必要を含んでいるわけではない」と書いていた<sup>20)</sup>。中央委員会―いな、その名に隠れて、最新の、気高い真理を個人の困惑で切り裂くやり方をするスターリン―と読み替えよう。スターリンを哲学の脚立の上に上らせ、デボーン派を壊滅することが基本であった。デボーン派の悲劇は、「優秀で信頼に足るレーニン主義者」、「今日のレーニン」として認められたい、すなわち、その意味するところ、理論家、思想家として認められたいというスターリンの決然とした努力により、すでに運命付けられていた。新しい哲学の指導者たちの共著で、ミーチンの編により一九三三年に出版された『弁証法的・史的唯物論』という教科書の「レーニン主義―マルクス主義発展の新しい、最高の段階」という箇所にはレーニンの著作からの引用が一切なく、かわりに、すべてスターリンの著作に由来する六つの引用があった。

一九三一年一月、全連邦共産党（ボリシェヴィキ）中央委員会の、『マルクス主義の旗の下に』誌に関する有名な決議が採択されたが、そのなかでデボーン学派は、スターリンによつて捏造された、文法的に間違つていて、かつ不合理な結合語、「メンシェヴィキ化する観念論」という語で呼ばれた。デボーンはそれまで負つていたすべての職務か

ら解任された。ヤークヴ・ロキチャンスキーは、一九三一年一月にデボーンが置かれた抑圧的な状況に関するデボーンの息子、ガヴリール・アブラモヴィチとの会話を引用している。「彼はしばしば夕方になると家から出ました。わたしたちは、スタロニコニューシニヤ横町に住んでおりました。わが家からそう遠くないところに、ゴーゴリ・ブルヴァール（並木道）がありました。そこで彼はひとりで長い時間を過ごしました。母は、彼が自殺するかもしれないと、たいへん心配しておりました<sup>21)</sup>。たぶん、これらの事実が混同され、一九三七年【すなわち、「大粛清」のピーク：訳者】、デボーンが夜間、内務人民委員部の職員が彼を捕まえに来ることを恐れて、ゴーゴリ・ブルヴァールのベンチで夜を過ごしていたという伝説が生まれたようだ。

一九三一年一月二〇日、デボーンは遺書を書いた。「わたしは名誉を汚され、踏みじられ、抹殺された。わたしにとつて人生は、あらゆる意味を失った。自発的な退場―これが作られた状況からのより良い脱出だ。自分の反マルクス主義とメンシェヴィキ化する観念論を認める書類に署名することはできない。差し迫つた、屈辱的な党からの除名―それを引き延ばすこともできない<sup>22)</sup>。デボーンの妻はこのメモを読むとただちに民警を呼んだ。デボーンはモスクワ川の川岸で見つかった。ユーリー・クリヴォノソフ【現代の科学史家・科学社会学者：訳者】は、雪に漬かり、ほとんど反古になつた状態の、デボーンの命を助けるよう懇願するニコライ・ブハーリンのスターリン宛書簡を、モスクワ民警刑事部の援助をえて見つけ出した<sup>23)</sup>。

デボーン学派の若い一員だつたB・レズニツクの証言もある。「メンシェヴィキ化する観念論」が提示された日、カレフ【ニコライ：訳者】から電話があつた。夕方、デボーンの家に行こう、とのことであ

った。何しろこの老人にはたいへん悪い状況だった。わたしたちはデポーリンのアパートに行つた。彼はいなかつた。彼の物静かな親戚が、わたしたちに紙片を見せた。そこには、『恥辱に耐えられない。これ以上生きることは何にもならない。去ろう』と書かれていた。親戚たちは民警に伝えたが、まだ何も明らかになつていなかった。そこに、リヤザーノフと、そのあと、ブハーリンがやつてきた。彼にはこのできごとを伝えることができたのだ。ときたま空虚な言葉が投げかけられるだけで、沈黙のうちに待つた。突然、ベルが激しく鳴つた。頑丈そうな民警が入つてきたが、その腕には温かい毛皮外套に包まれたデポーリンが抱き抱えられていた。彼は凍死で自殺しようと思ひ、ベンチに座り、まさに凍死するところだった<sup>(24)</sup>。プリマークの言では、デポーリンは「メンシエヴィキ化する観念論」撲滅キャンペーンの当時、発作に襲われていたという<sup>(25)</sup>。

一九三一年一月二五日に共産党中央委員会の『マルクス主義の旗の下に』誌に関する決議が公に発表されると、デポーリンとその教え子たちは「メンシエヴィキ化する観念論」者として公式に権利を剥奪された。デポーリンが、自分の立場を変えて、みずからの「あやまち」を公式に認め、『アラウド』紙に書簡を送る（一九三二年一月一六日）まで、おおよそ一年を要した。新たに認めた自分の「あやまち」について、彼は一九三三年には公式に語ることが必要となり、カール・マルクス没後五〇周年を記念した哲学研究所の学術会議で演説した。同じ一九三三年には、彼は、ヴェルナツキーの「哲学的あやまり」を批判する演説もおこなつてゐるが、それは単にイデオロギー的な動機からだけでなく、個人的な理由にもよるものであつたことには疑いが無い。ミーチン、ユージン、ヴラジーミル・ベレストニエフが『マルクス主義の旗の下に』<sup>(26)</sup>

誌上で次々とデポーリン派を摘発する論文を発表したあと、一九三六年一月二二日の科学アカデミーの党員グループの会議の席上、また新たに自分の「あやまり」について審議することを余儀なくされた。

スターリンは、「アカデミーで働かせても、哲学の諸問題では出版をさせないように」と述べて、デポーリンの運命を決めた。このようにして、デポーリンはその生涯の重要事に携わる可能性を剥奪され、自らの作品をただ「机のなかに」だけ書くことができるだけとなつた。彼は「出国禁止」になつた。ソ連科学アカデミーにデポーリン個人に宛てたヘーゲル哲学会議への招待状が届いたときも、この会議の組織委員会にはデポーリンが病気で出国不能であるとの公的な返事が差し向けられた。招待状はデポーリンの手には渡らなかつた。デポーリンが弾圧されなかつた事実について、プリマークは次のように説明しているが、それは正しいであろう。「最近になつて肩書をえたばかりで、社会科学に無知な連中、すなわちミーチン、ユージン、コンスタンチノフ【フョードル：訳者】やイオブチュク【ミハイル：訳者】らの手に委ねることはできないと知つて、スターリンは、彼らをデポーリンの「補助者」に留め、デポーリンを、彼の組織者としての経験と博識が明らかに必要だつた科学アカデミー機関に推薦しさせた<sup>(27)</sup>」。ミーチンの回想によれば、一九三〇年二月九日の、スターリンと「哲学・社会科学赤色教授学院」党細胞ビューロー員との『マルクス主義の旗の下に』誌の新しい編集者候補に関する有名な会談のなかで、スターリンは「デポーリンは、自分の意見では望ましくない人物ではある。しかし、誰かを攻撃しないように編集部には残さなければならぬ<sup>(28)</sup>」と述べたという。独裁者が「ユダヤ人ブルジョア・ナシヨナリズム」との闘争の時期になつて、その主要な犠牲者のひとりとして彼の名を挙げるまでの二〇年間、デポー



リンはこの職に留まった。幸いなことに、独裁者はそのもくろみを実現することはできなかった。

活力が充実しているときに、この科学者はその愛する科学から引き離された。デボーリンの教え子はみな弾圧された。公衆の面前で非難されるといって、不確実なプレッシャーのなかで暮らし、ときにみずからの教え子の横死を知り、公開の場での、および個人による攻撃に曝された。

デボーリンは、ロシアにおける科学史研究の組織化に一定の貢献をした。一九三〇〜三二年、彼は科学アカデミー・知識史委員会のビューロー【少数の人員からなる常設機関、事実上の指導部：訳者】・メンバーで、一九三一年からは副議長を務めた。一九三二〜三八年、彼は科学アカデミー・科学史Ⅱ技術史研究所の副所長の職にあった。この組織のなかで、彼はニコライ・ブハーリンとともに働いたが、ブハーリンとは哲学上の諸問題に関する意見の相違にもかかわらず、信頼関係を築いた。ブハーリンはデボーリンを「わたしのラビ（教師、指導者【ユダヤ教の、：訳者】）」と呼び、複雑な問題で彼と相談することを重要とみなした。科学史Ⅱ技術史研究所で、科学アカデミー幹部会で、デボーリンは出版事業を監督した。彼の編集で、論集『レオンハルト・オイラー』が出版された（一九三五年）。彼は『科学史Ⅱ技術史アーカイヴズ』誌を編集した。

予期せぬ結果をとまなう過酷なイデオロギーのプレッシャーを気遣わずに済み、かつ一九三〇年代前半に書くことができた、たつたひとつのテーマ、それはファシズム・イデオロギーであったに違いない。哲学史の諸問題ですら、デボーリンの研究対象とはなりえなかった。彼はファシズム・イデオロギーの哲学的基礎にたいする批判に集中した。一九三五年四月、共産主義アカデミーの会合で、彼は「ファシズムの哲学」と



ソ連科学アカデミー総裁アレクサンドル・カルピンスキーの葬儀にて。左端がスターリン、右端がデボーリン、1936年。インターネット・ソース (<http://anticvarium.ni/lot/show/16491>)。

題する報告をおこなった。

一九三五年一月から一九四二年一月にかけて、デボーリンはソ連邦科学アカデミー・社会科学部の書記役アカデミー会員【各部門の調整役Ⅱ実務執行者：訳者】であった（一九三五年〜三九年には科学アカデミー幹部会員）。デボーリンは、彼の博識にたいする敬意を以て接してくれ

る古い世代のアカデミー会員のなかで、尊敬と権威を享受した。アヴネル・ジーンシは次のような興味深い事実についての思い出を語っている。「科学アカデミー・社会科学部で、現代生物学の哲学的諸問題」というテーマを掲げた会合があった。この会議には、アカデミー会員、レオン・オルベリ、リーナ・シュテルンといった科学の世界で世界的名声をもつた、偉大な生物学者、その他おおぜいが出席していた。ニコライ・イリイン教授が報告をしたが、そのなかで、大略次のように発言した。「ブリュッセル大学のアンリ・レジエ教授はその報告『生氣論の諸問題』のなかで、こう書いています……。しかし、息継ぎを俟ってデボーリンが割って入り、お詫びを口にしつつ、生氣論の諸問題で本を書いたアンリ・レジエ教授がブリュッセル大学ではなく、リエージュ大学の教授であること、ブリュッセル大学には生物学にアンリ・レジエ教授がいるが、生氣論ではなく、固体発生学を研究していることを告げた。生物学者たちは衝撃を受け、すべての研究活動がひとりの人物、生物学に直接の関係

をもたないデポーリンの掌中にあることを確信した。…この小さなできごとが彼らのデポーリンにたいする態度を決定したようだ<sup>24)</sup>。デポーリンは並外れた活動能力で傑出していた。彼は一日中、夜中でも学術的な仕事に取り組み、定期的に何百という外国語の新刊書を調べ、人文科学に関する同時代の世界の文献すべてに通じていた。

科学アカデミー・編集 出版評議会の、一九三七年からは副議長、一九五〇年五月から一九五五年二月まではビューロー・メンバー、一九六二年二月からは一委員を務めた。編集・出版評議会で活動していた間、デポーリンの手でソ連邦科学アカデミー総会資料集がまとめられた。長期にわたり、彼は『ソ連邦科学アカデミー紀要』副編集長であり、編集の仲間から大いに愛された。彼は、論集『階級発生以前の社会史の諸問題』（一九三六年）、『アレクサンドル・プーシキンの死から一〇〇年』（一九三八年）、『ゲーテ』（一九三九年）、『スペインの文化』（一九四〇年）、『ガリレオ・ガリレイ』（一九四三年）の責任編集者であった。

デポーリンは一九四一年における科学アカデミー幹部会の疎開の責任者を務めた。彼は幹部会の建物に最後まで留まったのち、カザンに送られた。一九四一年から四三年までカザンにあって、彼は、この都市の住民にたいする講演活動を実施する科学 技術プロパガンダ・ビューローを率いた。

一九四三年からデポーリンはソ連邦科学アカデミー・歴史学研究所の現代史セクターを率いた。一九四八年、彼の編集で『近現代史に関する研究』が出版された。『コスモポリタニズムとの闘争』のクライマックスで、この論集、および、イヴァン・マイスキー、ボリス・シュテイン、アレクサンドル・ネクリツチら、セクターの研究員の研究は公式に、出

版物のなかで、〃欠陥をもつもの〃と宣告された。デポーリンの回想によると、魔女狩りのような反コスモポリタニズム騒ぎのピークの頃、彼は研究所から重苦しい様子で帰り、ソフアーに横たわると、妻に辞表を書いたことを告げたことがある、という。しかし、次の日になると研究所から電話があり、たぶん〃上級〃と相談のうえであろう、彼に辞表を持ち帰るように頼んできた。一九四九年、デポーリンは解職【セクター長職から、…訳者】となり、上級研究員に降格した。

反セム主義キャンペーンのシナリオでは、デポーリンは罪を着せられるもののひとりとなるはずであった。以前彼と一緒に科学アカデミー幹部会で活動していた何名かは逮捕された。彼らは、科学アカデミー指導部の一掃を目的とするテロリスト・グループに加わったことを罪状とされた。デポーリンは、これらグループの〃パトロン〃という役割を割り当てられていた。並行して、同じ関係者にたいする、ロシア人科学者の迫害と殺害を組織しようとしていた〃ユダヤ人ナシヨナリスト【シオニストのこと…訳者】・グループ〃のスパイ活動に関する事件もでっち上げられた。

一九五三年三月、デポーリンは科学アカデミー・歴史学研究所の学術会議から締め出された。この同じ月、科学アカデミー幹部会の特別会で、彼の〃敵対的活動〃が審議された。科学アカデミー・要員管理部によつて、この会合のために、アブラム・モイセーヴィチ【デポーリンのこと…訳者】の学術活動に関する、あからさまに歪曲された参考資料が準備された。無慈悲な攻撃を耳にして、すべての罪状について反駁した。この時点ではどのような決定もなされなかった。この状況の特異な点は、スターリンの死後にもこのような会合があったことであるが、根底から社会の雰囲気を変えた、一九五三年四月四日付の『医師団 妨害者【一

九五三年一月、九名のユダヤ系医師が政府要人の殺害をもくろんでいるとして逮捕された事件の容疑者：「訳者」の名誉回復に関する政府広告の公表はまだであった。

一九五三年四月、同じ問題が科学アカデミー・歴史学研究所研究員総会で審議された。デボーリンのもとで調査担当として働き、彼と親密な関係にあったアレクサンドル・ネクリツチはみずからのメモに、こう書いている。「デボーリン老人の演説は、この会議のドラマチックの瞬間であった。それまで、またその後も、わたしはアブラム・モイセイヴィチの、このような何にも囚われない、鋭い演説を聞いたことがない。彼は、まるで別人のように見えた。デボーリンは少し興奮した様子で、いや、たちまち立腹した様子で演壇に立つと、彼に着せられた罪状の一切をひとつひとつ斥けた。『これらはみな虚偽です』。彼は憤慨して大声をあげ、演壇から降りて、少しよろつきながら、ホールの壁に沿って出口へと歩んだ。わたしは彼の心臓が破裂していないかどうか、あるいはショックを起こしていないかどうか、心配になったが、幸いなことに、何も起こってはいなかった」。

デボーリンはソ連邦共産党中央委員会に申立書を書いた。彼は彼の学派、彼の教え子たちの悲劇的な運命を語った。彼は引き続き、「自分について言えば、わたしはすべての役職から放逐され、自分の著作を公刊することを禁じられ、すべての著作を流通から排除する措置などが続いた。わたしを精神的に殲滅するために、あらゆることがなされた」。

一九五六年一〇月のある日、デボーリンが党中央委員会の応接室にアナスタス・ミコヤン【政治家、当時、党中央委員会幹部会員：訳者】を訪ねる日がやってきた。ミコヤンはデボーリンに問うた。「アブラム・モイセイヴィチ、メンシェヴィキ化する観念論とは何でしょうか」。デ

ボーリンは応えた。「それはこちらがあなたに聞かなければなりません。メンシェヴィキ化する観念論とは何でしょうか。これは、お互いに排除しあうふたつの概念ではないでしょうか」。ミコヤンは「安んじて働くように」とデボーリンをなだめた。

しかしながら、その意図【メンシェヴィキ化する観念論】批判の：「訳者」を「解明」したソ連邦共産党中央委員会布告は取り消されなかった。これに沿って何十人、何百人という人が出世したからであった。デボーリンは、自分の著作を集めた論集を公刊することを許されたが、その論集を『弁証法的唯物論の擁護のために』と名付けることは許されず、明らかに論争的な『哲学と政策』というタイトルを選択した。しかし、一九二〇年代末から一九三〇年代初めにかけての哲学論争を反映した著作を論集に含める可能性は与えられなかった。

ミコヤンは、ソ連邦共産党中央委員会幹部会に、このアカデミー会員の、科学アカデミー・歴史学研究所、同哲学研究所の学術会議構成員としての復権を認め、図書館の特殊蔵書、ないし開架用に没収した彼の蔵書を返還するように提案した。スターリン主義の情性が強かったため、これらの決定は秘密裏に実行され、ミコヤンが提案したように、党中央委員会布告として公式に明らかにされることはなかった。一九五六年一〇月、デボーリンは上記の諸研究所の学術会議構成員として復権した。

ソ連邦検事総長の応接室で、デボーリンは、自分が首魁であると認識されていた「テロリスト・センター」の事件を知らされ、銃殺された彼の戦友全員の名誉回復が行われたことを告げられた。各級党機関、人権擁護機関への書簡という手段で、デボーリンは彼の一群の教え子たちの死後名誉回復を援助した。

一九五八年、五〇巻にもなる『ソヴィエト大百科事典』第二版の刊行

が完了した。それまでに弾圧され、名誉回復した軍人、作家、科学者、俳優、国家機関活動家の伝記が含まれるはずの、追補第五巻が必要であった。Ⅱ項が入った巻は「コスモポリタニズムとの闘争」のクライマックスで出版された。アカデミー会員デポーリンについては、百科事典は沈黙することで、かえって雄弁であった。長く科学アカデミー社会学部を率いたアカデミー会員に関する項目を百科事典が欠いているということは、逮捕と横死の見込みを示すものであった。しかし、運命はデポーリンを赦した。彼を扱った項目は『ソヴィエト大百科事典』の第五巻に現れたが、このことはたいへんシンボリックであった。

科学アカデミー・歴史学研究所で、デポーリンは現代史の社会・政治的研究に関する大著の刊行を準備した。デポーリン家には、何百冊という、彼が「レーニンもの」と呼んだ、外国語文献の書誌情報を書いたメモ帳が残されている。ネクリツチのあと、彼のもとで調査担当として働いたプリマークは、八〇歳のアカデミー会員の仕事のスタイルをこのように書いている。「このアカデミー会員の巨大な博識ぶりとその巨大な活動能力とを考えると、わたしの仕事は決して簡単なものでないことがわかった。彼は一日中、そして夜中も、政治思想の古典的著書を読み、それからそれらの著者たちに関する著作を読んだ。彼は、何ら「梗概」も「下書き」もなしに、直接清書して、わたしにテキストを渡した。：毎日、このように休憩もなしに働き、二週間でもひとりの思想家を「ものにする」ことができた」。

抹消も訂正もなく、理想的な書体で、清書する—デポーリン以前のロシア思想史でこれに類する能力をもっていたのはドミートリー・ピーサレフだけであろう。残念ながら、このアカデミー会員の公表されていない手稿は失われた。家族のもとには、ただ、デポーリン自身の手によ

っては公刊されなかった古典哲学史に関する膨大な手稿とシェリングの弁証法に関する未完の論文だけが保存されている。それは、最後に一九三〇年に彼が書いた哲学に関する著作であり、首領によって自分の専門分野で研究することを禁じられ、途中までで中断したものであった。本評伝の筆者は、二〇一一年〜二二年、URS S社からデポーリンの本と幾人かのその後継者（カール、H・R・ヴァインシュタイン、イズライリ・アゴール）の著作を再刊する機会に恵まれた。古い著書の再刊とならんで、アブラム・モイセーヴィチが実現できなかった彼の企画も実現した。彼はドイツ古典哲学における弁証法的方法の発展に関する単著を執筆したいと願っていた。まだリャザーノフが編集していた『カール・マルクス・フリードリッヒ・エンゲルス・アーカイヴズ』に、彼はカントとフイヒテの弁証法に関する総説を発表した（一九三一年におけるダヴィド・リャザーノフの逮捕後、スターリン独裁確立以前にソヴィエト・マルクス主義者によってなされた功績を一切抹殺したうえで、『アーカイヴズ』は改めて第一巻から刊行されるようになった）。二〇一二年、デポーリンの夢はその死後に実現した。彼の著書『ドイツ古典哲学にける弁証法—カント、フイヒテ、シェリング、ヘーゲル—』が刊行された。この著書には上述した二篇の総説、ヘーゲルに関する論文、別の目的で書かれたもの、手稿から出版された、シェリングに関する論文の冒頭部が含まれていた。手稿は著者の側での訂正などない、読まれるべく、美しい書体で充たされた、大きな一覧表であった。手稿が途中で切れているのは、デポーリン学派的悲劇的な運命を象徴している。

一九六一年六月二三日、科学アカデミー・歴史学研究所学術会議でデポーリンの八〇歳を記念する祝賀がおこなわれた。科学アカデミーを代表してのお祝いの挨拶は、ソ連邦科学アカデミー副総裁コンスタンチ



ン・オストロヴィチャノフがおこなった。高名な歴史家、ヴラジミール・フヴォストフ、イヴァン・マイスキー、ヴィクトル・シュンコフ、ボリス・ポルシニエフ、II・II・ラヴロフがお祝いのスピーチをした。科学アカデミー・哲学研究所からは、最初の「デポーリン派」の研究所研究員でありながら、ただひとり弾圧を逃れ、哲学研究所で働き続けたミハイル・ドゥインニクが挨拶した。

デポーリンはその生涯の最後の二〇年を、哲学史、人類の社会Ⅱ政治思想史に関する浩瀚な著作の準備に捧げた。膨大な哲学史の資料を基礎に、集団主義的、共産主義的、マルクス主義的理念形成の法則性を示そうと努力した。彼は、とくに、カール・マルクスの初期の著作、とりわけその疎外の理論を特徴付け、社会のヒューマニズム実現のプロセスとしての社会主義を明らかにするつもりであった。この仕事は未完に終わった。しかし、科学アカデミー図書館のデポーリンの個人ファイルには、この著書の発展した計画・展望が保存されている。

高齢と病気がこの企画実現の前に立ちほだかった。しかしながら、このアカデミー会員はわが国における職業的哲学再生の目撃者となった。この再生は、一九二〇年代にデポーリン学派が道を開いた、まさにそのやり方、すなわち、『資本論』研究を基礎とする弁証法理論、スピノザ、カント、ヘーゲルの哲学史的研究、量子力学、相対性理論、遺伝学といった、自然科学の先進的な方向性に関する哲学的な諸問題の考究に沿って進んだ。デポーリンの死後刊行された著作集の編集者となったのは、デポーリンの晩年、一切ならず彼を見舞ったエーヴァリド・イリエニコフであった。一九六〇年代、ソヴィエト弁証法論理学の探究は、デポーリンとその学派の理念を新しい条件のもとで数多く再生することとなった。

一九四五年、五五年、六一年、デポーリンは科学アカデミー・幹部会から「レーニン勲章」受賞者に推薦されたが、最初と最後の機会には「労働赤旗勲章」に「格下げ」され、一九五五年には「反コスモポリタニズム」の趣旨をよく把握した科学アカデミー・要員管理部の指導者たちの発案で、その名前は推薦リストから外されていた。彼は「一九四一〜一九四五年大祖国戦争における献身を称える」メダル（一九四六年）、「モスクワ市八〇〇年記念」メダル（一九四八年）を授与された。

アブラム・モイセイヴィチは性格的にはたいへん善良で、たいへんデリケートで思いやりのある好人物であった。彼は若者には常に手を差し伸べ、若者は彼とともにいるのを楽しんだ。

デポーリンは、一九六三年三月八日に亡くなり、モスクワのノヴォデヴィチ墓地に埋葬された。



ブレジネフから勲章を授与されたデポーリン（右から二人目。その左隣がブレジネフ、1961年）。未亡人提供。

デポーリンのような高名な学者にたいする伝記的評価においては、伝統的には、その理念の評価をおこなない、その人物が創始した学派におけるさらなる研究の発展を明らかにしなければならないことになる。残念ながら、この原則は、今回は「機能不全」となる。この傑出した学者は、その活力、経験、才能のピークでみずからが愛する学問に取り組むことを禁じられ、その教え子は全員が根絶やしにされ、その学派は権力の名で誹謗された。ソヴィエト・マルクス主義哲学の歴史は悲劇的で、客観主義的

にできごとを叙述することができず、どのようにしたらこうしたできごとが不快な感情をもたらさなくなるのかを明らかにするために、評価には多くが求められる。

今日、当問題の研究進化の段階は、残念ながら、百科事典の項目執筆者たちが、デボーリンについて何を書くべきか単純にはわからないというレベルにある。『ロシア大百科事典』でも、『ロシア新百科事典』でも、少なくないページがアメリカの映画俳優やスポーツマンに割り振られているのに、デボーリンの項目は見いだせない。この点では、これらは十分に、すでに叙述した『ソヴィエト大百科事典』のスターリン化された第二版の後継者なのである。

同時に百科事典的な出版物におけるデボーリンの項目は、判で押したように、デボーリンに関する歪曲された理解が定着している。このように、最新の、堂々たるテラ社版『大百科事典』でも、アブラム・モイセーヴィチについては、みずからの演説における批判【自己批判：訳者】のち、彼は「公式マルクス主義の弁護人となった」とされ、「スターリン時代における弁証法とマルクス主義哲学の諸問題に関する主導的な専門家。ヨシフ・スターリンの死後、その哲学の諸問題にたいするアプローチが変化を蒙らなかつたために、大きな影響力を発揮しつづけた。学術誌、哲学雑誌に継続して論文を発表した」と書かれている。

ここで言われていることはみな、正確には逆である。スターリン単独権力の、ほぼ四半世紀の間、デボーリンは「弁証法とマルクス主義哲学の諸問題に関」しては一行たりとも書けなかつた。これらの問題に関する「主導的な専門家」としての地位から彼を転落させたのは、かなりの程度、その哲学的素養の【高い：訳者】水準ゆえに、彼がスターリン流のマルクス主義の伝声管たりえなかつたからである。彼の「哲学の諸問

題にたいするアプローチ」は、彼の見方にたいする公式の非難にもかかわらず、デボーリンがマルクス主義の弁証法的でヒューマニスティクな解釈に忠実なままでおり、それゆえ、どのような影響も受けなかつたという意味で変化を蒙らなかつたのである。スターリンの死後はじめて、デボーリンは学術誌に論文を掲載することが可能となったが、それも歴史の諸問題、哲学史の諸問題に限定されていた。

参考文献にデボーリンに関する歪曲された情報があるのは、次のことで完全に説明される。周知のように、一九五〇年代末から六〇年代はじめにかけての、みずからの哲学的名誉回復と「メンシエヴィキ化する観念論」に関するソ連邦共産党中央委員会布告の取り消しをめざす、デボーリンの闘いは成功しなかつたのである。

一九八〇年代も終わり近くなつても、学術文献、参考文献のなかでは一九三〇年代はじめの虚偽の告発の繰り返しが再度おこなわれていた。哲学において、「メンシエヴィキ化する観念論」の虐殺と、デボーリン派の血と受難と横死のうえに出世を遂げた面々（ミーチン、コンスタンチノフ、ユージンら）が支配的な地位にあつた間、状況は変えられなかつた。

しかしながら、スターリン版ソヴィエト哲学の復活は今日も起こっている。二〇〇九年、『哲学事典』第八版出版にあたって、編集者の意図で、上述した「学者」だけではなく、科学アカデミー名誉会員スターリンの伝記も掲載が認められた。ルポールやボリス・ゲッセンといった殺された科学アカデミー会員でデボーリン派であつた人々については項目もなく、デボーリンその人についてもたいへん短い項目が割り当てられているだけである。

「メンシエヴィキ化する観念論」という嘲笑的なレッテルを考案した

スターリンも、殺人的な布告を発した中央委員会もいなくなり、「哲学戦線におけるポリシェヴィキ化のための戦士たち」の論文をだれも読まなくなつて久しい今も、デボーリンの哲学的名譽回復は現在にいたるまでなされていない。これは別の理由による。

一九九〇年代のマルクス主義「告発」ブームのなかではまったく驚くに値しない。この二〇年間に出版された文献のなかでは、デボーリンの創造的活動はニヒルスティクに評価され（アレクサンドル・オグルツォフ、ヴラジーミル・フィラトフ）、彼が立てた問題の理論的重要性は否定され、彼の哲学的理念は、イデオロギー化されたドグマティズムと説明され、デボーリン派の活動は「科学の諸分野への十分な知識を欠いた介入」であり、「科学と哲学にとつて無知ゆえの危険性」であつたと確認されている。ここで名前を挙げた著者たちは、デボーリン派の活動が遺伝学の発達を何十年か停滞させたとき主張している。しかも、傑出した哲学者にして遺伝学者であつたアゴール、ソロモン・レヴィト、ヴァシリ・スレプコフを含む学派についてもどのように語っているのである！間違ひなく、彼らの横死はわが国における遺伝学の発達を、多くの場合、停滞させた。実際は、デボーリン派による方法論としての唯物論的弁証法の研究は、哲学的知識の特殊性と個別科学の独自性に関する深い認識を以ておこなわれていた。墓さえ造られなかつた受難者たちに投げかけられた、バカバカしい、嘲笑的な告発について、何を語ればよいのであろうか。<sup>37</sup>

デボーリンの歴史的なイメージは歪められているので、別の、対立する伝統、すなわち、創造的マルクス主義の伝統のうえで活動している著者たちですら、彼について歪曲された理解を繰り返している。セルゲイ・マレーエフは、デボーリンにとつて、『資本論』は何とか傍らを通

りすぎるものであり、デボーリンは「一九三一年、有名な全連邦共産党（ポリシェヴィキ）中央委員会の有名な布告『マルクス主義の旗の下に』誌について」がマルクス主義とマルクス主義哲学に「レーニン段階」が実在することを認知するまで、レーニンをオリジナルな哲学者とは見なしていなかつた。それまで彼はレーニンという哲学者を「プレハノフの教え子」と見なして<sup>38</sup>おり、レーニンをデボーリンから擁護したのはミーチンであつたし、<sup>39</sup>レーニンは天才的な実践家で、プレハノフは天才的な理論家<sup>40</sup>というデボーリンの公式が誇らしげにまかり通つていて、「このことは、結局、レーニンに『首領』としての名譽を与えつつも、哲学を含む理論の領域では、デボーリンとその追隨者、ルポール、カーレフ、ステン【ヤン：訳者】、アスムス【ヴァレンチン：訳者】、そして、レヴィト、ゴニクマン、バムメリ、ストリヤロフに完全な独占の余地を残していた（が）、ポリシェヴィキ・レーニン主義者の哲学者は、このとき、まったくいなくなつた」し、最後に、「スターリンだけが、レーニンを天才的な実践家のみならず、天才的な理論家であると主張したことになる」と書いている。このように、エーヴァリド・イリエンコフの後継者を自認する著者は、創造的マルクス主義の名の下に、意識せずして、ミーチンによる捏造を繰り返し、その結果、「創造的マルクス主義」の語意を完全に転倒させてしまつている。

マレーエフにはるかに先立つて、ミーチンは一九三〇年一〇月におけるデボーリン派一掃の際に、「スターリンが与えた理論的問題とならんで、実践性という重要な問題の解決のこのような模範こそ、現実の創造的マルクス主義である」と申し立てた。スターリンは好意的にこのような命題を受け入れ、「創造的マルクス主義の視点に立つ」ことを宣言した。マレーエフは、彼が望むと望まないとにかかわらず、ここでもスタ





- (38) Мареев, С.Н. «Из истории советской философии: Лукач – Выготский – Ильенков». М., 2008. С.371.
- (39) Там же, С.37.
- (40) Там же, С.141.
- (41) Там же, С.17.
- (42) «Вестник Коммунистической Академии». 1930. №40/41. С.48.

訳者解題

С.Н. Корсаков, "Краткий очерк научной, научно-организационной и общественно-политической деятельности". Российская Академия наук, «Абрам Моисеевич Деборн: Библиография ученых, философия, вып.6» (составитель – С.Н. Корсаков). Москва: Наука, 2013. С.6-43.

ソ連時代の一九四一年からロシア科学アカデミーは傑出した自国の科学者の小伝を小冊子スタイルでシリーズ刊行している。ここに訳出したものは、その一冊(哲学の部第九冊)で、ソヴィエト哲学史上に名高い弁証法哲学者、アブラム・デポリーンの小伝のうち、セルゲイ・コルサコフ氏が執筆した評伝の部分である(この小冊子には他に詳細な年譜、文献一覧など資料が含まれている)。コルサコフ氏は電子メールで翻訳・出版の許可をいただいている。同氏によれば、二〇一九年現在、二〇三歳のデポリーンの未亡人も日本での翻訳・出版に期待しているそうである。なお、日本人読者にアピールするため、タイトルは本誌編集部で工夫した。訳文においては、本来、人名はその初出箇所(原綴りと生没年を表記すべきであるが、ここでは紙幅の都合からそれを避けた。ロシア人の名前は、名・父称・姓の三つの部分からなり、通常、前二者はイニシャルだけが表記されるが、ここでは可能な限り、ファースト・ネームを記しておいた。訳注は最小限にとどめ、本文内に□に入れて簡潔に示した。訳注の出典は、多くの場合、ロシア語版ウィキペディアなど、インターネット・ソースである。デポリーンを主役のひとりとするソヴィエト哲学史については、ルネ・ザバタの『ロシア・ソヴィエト哲学史』(原田佳彦訳、白水社、一九九七年)が日本語で読める格好の入門書として長く参照されてきたが、中世の『ロシアの霊性』からソ連末期までを俯瞰したために叙述が簡潔にすぎない上に、ソ連解体後によりやく閲覧可能となった、かつての非公開發行資料は利用されておらず(原著は一九八八年にフランスで出版されている)、いささか古くなってしまっている。藤岡毅「ルイセン」主義はなぜ出現したか―生物学の弁証法化の成果と挫折―『学術出版会 二〇一〇年』は過酷な運命を辿ったソヴィエト生物学を対象とする好著であるが、その一部(七九―一〇ページ)は、「機械論派」とデポリーンの弁証法家との間の、いわゆる「ソヴィエト哲学論争」に関する、研究の今日的な到達点に立った、簡潔で正確な要約となっている。ここでの藤岡のデポリーンの評価は総じて肯定的である。やはり科学史における研究成果であるが、金山浩司の『神なき国の科学思想―ソヴィエト連邦における物理学哲学論争―』(東海大学出版会 二〇一八年)は、戦前期ソ連における、デポリーンを含むマ

ルクス主義哲学(著)と科学(著)との間の「交流」、「協調」と「対抗」に彩られた、緊張した関係を辿った労作である。同書において、デポリーンの名はまさに「出づっばり」のように頻出している。ここに訳出したコルサコフ氏による評伝を紹介したのも同書が最初である(七二ページ)。金山は、デポリーンのそのグループの現代物理学へのアプローチに限界を見だし、「自己批判」後のデポリーンの、ある意味「追従的な」言動をやや冷淡に紹介しつつも、デポリーンの派を「メンシエヴィキ化する観念論」とする初期の攻撃について、「この『観念論』との規定は内実を伴っているようにみえない(八〇ページ)」と指摘し、デポリーンの派凋落の原因が政治気象の変化にあることを喝破しているが、今回訳出した評伝では、この「政治気象」の変化がダイレクトに語られていることになる。

この「政治気象」変化の主役にして、本評伝の、もうひとりの主役とも言えよう。スターリンに関する研究は、旧機密文書の公開開始以降、およそ二〇年の間に長足の進歩を見せ、単純な全体主義国家像からより多面的な理解へのソヴィエト社会研究の発展をともないつつ、多面的なスターリン像の探究が展開されている。横手慎二の『スターリン―「非道の独裁者」の実像―』(中公新書 二〇一四年)は、新書でありながら、こうした探究の成果を示すものとなっている。

横手はもっぱら政治家としてのスターリンを追求したが、科学史、あるいは哲学史の世界では、スターリンの別の一面、すなわち、ひたすら「知の権威」を身に帯びることを求めた人物としての側面が明らかとなってきた。たとえば、有名な言語学論争(一九五〇年)へのスターリンの介入については、ジョージア人言語学者アルノルト・チコバヴァという「黒子」の果たした役割を看過することはできないものの、スターリン自身が哲学問題では相当の主体性を持ち、いわゆる「ゴースト・ライター」も、特定の「助言者」や「顧問」でもたず、原稿をみずから草稿から練り上げていたことは今日広く知られている。生物科学に介入し、似非科学であったルイセンコ「学説」を支持したのは、みずからの「哲学的探究」の結果にほかならなかった(キリル・ロシヤノフ「第IV部第四章 一九四八年全連邦農業科学アカデミー八月総会におけるルイセンコ派の勝利―歴史解釈の問題―」、市川浩編『科学の参謀本部』北海道大学出版会 二〇一六年、三二四―三二九ページ)。帝政ロシアに奪われた高等教育就学機会へのルサンチマン、みずから後継を自負した「先達」レーニンが放つ輝かしい「知の権威」にたいする強烈なコンプレックス、こうしたものがスターリンをみずからに替わりうる「知の権威」狩りに追い込んでゆく。ポロツクの労作(Ethan Pollock, *Stalin and the Soviet Science Wars*, Princeton University Press, 2006)は後期スターリン期における彼の「知の権威」追求を描いて興味深い。

本評伝に登場した、他のキー・パーソンについて言えば、地球化学のバイオニアのひとりであり、科学思想家のウラジーミル・ヴェルナツキはその雄大な世界観がポスト・ソヴィエト・マルクス主義の時代に注目されることになった(ウラジーミル・ヴェルナツキ「梟雅範訳」『ノースフェーラー―惑星現象としての科学的思考―』水声社 二〇一七年、を参照のこと)。また、本評伝でまったくの「悪役」となっているミーチンの、庇護者スターリンを失ったその後については市川浩「マルク・ミーチンの来日(一九五九年)をめぐる」、(関西唯物論研究会編『唯物論と現代』第五七号、二〇一七年六月、八―九〇ページ)を参照されたい。